

天使の絞め

Tenshi no Shime



2026

マゾ格

もくじ

一	救いの手
二	誘惑の階段
三	息の奪い手
四	窒息と恍惚
エピ ロー グ	

- ・ 本作品は R-18 作品です。18 歳未満の方の閲覧・購入はご遠慮ください。
- ・ 本作品には暴力描写、性的描写等が含まれています。描かれている内容は現実での模倣を推奨するものではありません。
- ・ 本作中の設定や表現は創作であり、実在の人物・団体とは関係ありません。
- ・ 本作品の企画/執筆には AI ツールを活用しています。最終的な判断・編集は人間が行っています。

一

救
い
の
手

十 傷痕の記憶

独房の中の小さな鏡に映る自分の顔を、葉山誠はじつと見つめていた。リナとの対戦から
∞時間が経過し、ようやく独房からの外出が許可された朝だった。頬の腫れは引きつつあつ
たが、目の下に残る青紫色のあざがまだ完全には消えていない。鏡の中の自分は見慣れない
表情をしていた。痛みを知った目、そして何か目覚めてしまった欲望を秘めた瞳。

「だいぶマシになったな……」

誠は指先でそつと傷に触れ、かすかな痛みを確かめた。次に上半身の囚人服を脱ぎ、自分
の胸や腹部を鏡で確認する。そこにもリナの拳の痕跡が青あざとなつて残つていた。当初の
鮮やかな紫色から、今は薄い青緑色へと変化していたが、腹部に刻まれた連打の痕は特に鮮
明だった。彼は自分の腹部に手を当て、そつと押してみる。深く息を吸うと今でも鈍い痛み
が走った。

「この二日間は長かった……」

誠は小さくつぶやいた。回復期間として外出禁止の間、彼は独房の中でひたすらリナとの
戦いを反芻していた。閉じた目の裏に浮かぶのは、黒いボクシンググローブを装着したリナ

の姿。彼女の汗で濡れた肌、鋭い眼差し、そして容赦なく彼を打ちのめしながら浮かべていた冷酷な笑み。そして何より、彼自身の反応。痛みの中で感じた、言葉にできないほどの快感。通っていたクラブでは安全に配慮された中でのプレイを楽しんでいたが、それとはまったく異なる、本物の格闘で限界を超えて痛めつけられることへの陶酔を知ってしまった。

「次は：どうするか」

彼は壁に掛けられた拘束具を見つめた。手枷と足枷。女性スタッフの説明によれば、これらの拘束具は「専用の鍵がなければ外すことはできない」ということだった。独房から出るためには、これらを装着する必要がある。しかし、もし鍵を見つけることができれば、この施設から逃げ出せる可能性が出てくるだろう。あるいは、次の対戦でも——勝つのは難しいかもしれないが——有利な状況で戦えることは間違いないだろう。

「鍵は施設のどこか、囚人がアクセスしづらい保管されているはずだ」

彼は考えを巡らせた。だが、それは本当に自身の望みなのだろうか。誠は自分の内側にある感情に意識を向けた。心の奥底で彼が感じていたのは、逃げ出したいという思いではなく、むしろ次の体験への期待だった。リナとの対戦で目覚めた被虐心は、すでに彼の中で大きく成長していた。次はどんな相手と対峙するのか。どんな痛みを味わうことになるのか。この施設から脱出できるかという不安や、痛めつけられることへの恐怖よりも、期待が彼の心を

満たしていることに彼自身が驚いていた。

「鍵は追々探すでしょう…。今日は…誰かとの対戦をしようか」

モニターに映し出されていた審査官たちの顔を思い出す。リナの次は誰だろう。藤原ミサキ？ MMA スタイルと説明されていた女性だ。それとも桜井カレン？ サブミツシオン系の総合格闘家。あるいは高岡梨子？ パワープロレススタイルの女性。

「リナさんともう一度…いや、すぐに向き合っても結果は変わらない気がする。今回は違う相手が良さそうだな…」

しばらく悩んだ後、彼はカレンに会いに行くことを決断した。「サブミツシオン系総合格闘技」——それがどんなものか確信はなかったが、モニターで見た彼女の優しげな外見と、その背後に垣間見えた何かに、誠は惹かれるものを感じていた。

決意を固めた誠は、深呼吸をして手枷を手につった。背後で両手首を交差させ、冷たい金属を肌に当てる。「カチッ」という音と共に金属が閉まり、両腕が背後で固定される。続いて、膝について足首にも足枷を取り付けた。「カシヤン」という低い金属音が響き、彼の動きを制限した。不思議なことに、拘束具の感触は既に彼に馴染んでいた。冷たい金属が肌を締め付ける感覚に、彼はもはや恐怖を感じない。むしろ、その拘束感に安心感すら覚え始めている。自分で決められない状況に委ねられる解放感。それは彼の中に微かな高揚をもたら

した。

独房のドアが「ピッ」という電子音と共に解錠される。誠は肩でドアを押し開け、廊下に出た。「カラン、カラン」と足枷のチェーンが床を擦る音が静かな空間に響く。

天井からの照明が彼の上半身裸の肌を照らし出した。傷跡に照明が反射して、リナの拳によって刻まれた痕が浮かび上がる。それはある種の誇りと共に彼を満たした。そして、既に彼の心は次の対戦に備えていた。カレンとの対戦——どんな痛み、どんな支配が彼女からもたらされるのか、想像するだけで彼の心拍は早まる。

「まずはカレンさんの場所を探すことからか……」

女性スタッフからは各審査官の居場所について詳しい説明はなかった。どうやって彼女を見つければいいのか考えていると、遠くから女性たちの会話が聞こえてきた。

十 暗闇の襲撃

「マジで？ あいつ、リナさんにボコボコにされて射精したの？ キモすぎ」

「そうなの！わたし、モニターで見てたけど、本当最低よね」

鋭い女性の声が廊下の向こうから聞こえてきた。誠は思わず足を止めた。彼女たちが話しているのは、明らかに自分のことだった。彼は廊下の曲がり角に隠れ、慎重に覗き見た。

そこには二人の若い女性が立っていた。自由に歩いているところを見ると、この施設のスタッフだろう。どちらも「18〜19歳くらいか、まるで女子高生のような雰囲気を漂わせている。一人は茶色く染めた髪を肩まで伸ばし、露出の多い派手なピンクのトップスに白いミニスカート姿。もう一人は黒髪のロングヘアで、同じような恰好で青いトップスを着ていた。二人とも数センチのヒールのパンプスを履き、身長は160センチほどに見えた。

茶髪の女性は切れ長の瞳と高い鼻筋、小さな顎の組み合わせで、整った美貌を持つ美人だった。その顔には自信と残酷さとを同時に感じさせる表情が浮かんでいる。黒髪の方は大きな目と丸みを帯びた頬、柔らかな唇が特徴的で、どこか幼さの残る可愛らしさがあつた。しかし、その幼い顔には明らかな嗜虐心が宿っていた。

「あたし、あの変態マゾが実際どんな感じか気になるわ」

茶髪の女性が爪を確認しながら言った。長く伸ばされた爪には淡いピンクのネイルが施され、完璧なメイクの顔と相まって、その年齢以上の色気を感じさせる。

「私も気になるな。今日から外出許可だったよね？そろそろ出てくるんじゃない？」

黒髪の女性が廊下を見回した。誠は咄嗟に体を引つ込めた。心臓が早鐘を打っている。これは良くない状況だ。嫌な予感しかしない。彼は隠れていた十字路の壁に背をつけて息を潜め、彼女たちが気づかず通り過ぎることに一縷の望みをかけた。彼女たちの話声がだんだんと近づいてくる。通路からふたりの姿が見え、十字路を通り過ぎるかと思えたそのとき、願い空しくふたりの歩みが止まった。

「おっ！早速いた、噂の変態くん！」

黒髪の女性が彼に気づき、茶髪の女性の腕をつついた。二人は嬉々とした表情で誠に近づいてきた。

「ふーん、これが噂の？」

茶髪の女性が誠の周りをゆつくりと回りながら、上から下まで観察した。露骨な視線に晒され、誠は思わず身を縮めた。彼は上半身裸で、囚人服の下半身だけを身につけた状態。両手は背後で拘束され、抵抗の手段がまったくない。

「ねえ、あんた本当にリナさんに殴られて感じちゃったの？超キモいんだけど」
茶髪の女性が冷笑を浮かべながら言った。嘲るような声に誠の顔が熱くなる。

「あの…」

誠が言葉を探していると、黒髪の女性が一步前に出た。

「誠くんでしょ？わたし、アヤ。こっちはマキ」

アヤは明るく話しかけてきた。その表情や声色は、親しみというよりも、始めから彼のことを軽んじている様子を感じさせた。

「今日はどこに行こうとしたの？またリナさんに会いに？それともほかの人？」

アヤが言葉を継いだ。彼女の目は好奇心と軽蔑の入り混じった光を放っている。誠は気圧されつつも、目を逸らさずに答えようとした。

「カレンさんに会いに行くところです」

「カレンさん？」

二人は顔を見合わせ、意味ありげな笑みを交わした。

「あの人は優しいけど、死ぬほど怖いよ。あたし、訓練見たことあるけど男の人を絞めてる時の顔、マジでヤバイ」

マキが目を丸くして言った。彼女は誠に近づき、耳元で囁いた。甘い香水の香りが鼻腔にくすぐる。

「でも、あんたみたいなのには最高かもね」

彼女の吐息が耳に触れ、誠は身震いした。

「本当に会いに行くの？」